

手術を施行した。術前 MRI 上, T1 強調像にて脊髄後方より高信号・低信号・高信号の三層構造を持つ境界明瞭な髄内病変を認めていたが, 手術及び病理所見により後方より成熟脂肪組織と硬い繊維性のガングリオン様細胞を含んだ部分とそしてまた成熟脂肪組織であることが確認され, 軟膜下脂肪腫と診断した。手術は部分摘除に留め, 術後症状の軽減をみた。

#### 51. 白血球増多, 発熱などの炎症症状を伴った軟部肉腫 2 症例

石井 猛, 館崎慎一郎, 佐藤哲造  
米本 司 (県がんセンター)

症例 1: 84 才女性, 左大腿部脱分化型脂肪肉腫, 入院時 WBC36700, 腫瘍切除後白血球数が正常化。血清 GCSF 値は術前 249 と高値。症例 2: 29 才男性右大腿部 MFH。術前白血球数 17200, CRP 30.1, 血沈 153, 高度貧血, ALP, LAP が高値であったが, 腫瘍切除後すべて正常化した。術前血清 GCSF 値は 325, IL 6 が 1580 と極めて高かった。以上白血球増多, 発熱などの炎症症状を伴った GCSF 産生軟部肉腫 2 症例を報告した。

#### 52. 当院における鏡視下半月板手術例の検討

川口佳邦, 南出正順, 本田 崇  
阿部 功 (県立東金)

当院にて, 1992 年 4 月から 1995 年 3 月までに施行した鏡視下半月板手術例 44 例 44 膝に対し, 術後成績を調査し成績不良因子を検討した。日整会半月板治療成績判定基準にて治療成績を評価すると, 術前平均 32.8 ± 20.1 点が, 術後平均 86.6 ± 17.3 点と改善していた。術後成績不良因子として, 変形性膝関節症含む軟骨傷害, 靭帯不安定性が考えられた。さらに, 術後成績不良例 8 例中 6 例が外側半月板傷害で, 遺残半月板傷害の関与が示唆された。

#### 53. スポーツ選手の Love 法の術後評価

付岡 正, 岡崎壯之, 栗原 真  
徳重克彦, 金田庸一, 栃木祐樹  
(川鉄千葉・スポーツ整形外科)  
鍋島和夫 (鍋島整形外科医院)

腰椎椎間板ヘルニアに対する Love 法の臨床成績に関する報告は多いが, スポーツ選手の復帰状況についての報告例は少ない。今回我々は当院で Love 法を施行したスポーツ選手 33 例について, スポーツ復帰を中心に調査を行った。77% が元のスポーツ活動へ復帰, 51% が症状出現前と同レベル以上に回復した。また, 復帰レベルが低下した症例にスポーツ後の腰部疲労感

を訴えるものが多かった。

#### 54. 膝関節半月板損傷の MRI 診断能について

鈴木千穂, 西山秀木, 平山次郎  
(熊谷総合)

膝疾患 83 例 85 膝の MRI 像と関節鏡所見とを対比し, 半月板損傷の診断能について検討した。撮像はプロトン強調矢状断像, 半月板は Mink の分類に基づき評価した。Sensitivity, Specificity, Accuracy は内側半月板で 92.9%, 100.0%, 97.6%, 外側半月板で 88.9%, 97.9%, 94.0% と, 高い診断能を得たが, スライス方向の断裂では診断困難な例があった。False positive 例には関節鏡より MRI の方が実像を反映していると思われたものがあつた。

#### 55. 当院に於ける関節鏡視下膝関節授動術の成績

山下桂志, 三橋 稔, 和田佑一  
清水 耕, 小野智敏, 山越弘明  
青柳康之 (習志野第一)

当院で 1992 年以降施行した膝関節授動術 20 例の成績を検討した。内訳はホルミウム-YAG レーザーを用いた関節鏡視下授動術 8 例, プリスマンフォース 4 例, その他 4 例であった。6 か月以内の症例で関節鏡使用例が最終可動域に優れ, そのうちレーザー使用群は術後出血の合併症も少なかった。関節鏡視下膝関節授動術は関節内の癒着を直視下に処置でき安全かつ有用な方法であった。

#### 56. 膝人工半月板作製の試み

蟹沢 泉, 土屋明弘 (千大)

膝人工半月板の作製を目的とし成熟家兎 11 羽を用いた動物実験を行った。左膝内側半月板をカーボンファイバーかコラーゲン膜に置換し, 術後 4 週に屠殺し肉眼所見と HE 染色による組織所見により評価した。結果はカーボンファイバーを用いた群では 3 例中 2 例で半月形を保っていたが, 組織学的には異物反応が主体であった。コラーゲン膜を用いた群では脆弱な組織になっており, 組織学的には炎症反応が強く見られた。

#### 57. 抗うつ剤が奏効した ASH による嚥下障害の 2 例

田原正道, 大木健資, 林 謙二  
田内利幸 (国立精神神経センター国府台)

我々は頸椎に出現した強直性脊椎骨増殖症 (ASH) により嚥下障害をきたした 2 例を経験した。症例は 76 才男性と 69 才男性。両症例とも骨増殖による食道の直